

# メバチ 大西洋

(Bigeye tuna *Thunnus obesus*)



## 管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

## 最近の動き

2025年7月にICCAT熱帯作業部会によって、最新の資源評価が実施された。この結果、資源は乱獲状態ではなく、かつ過剰漁獲でないとして推定された。また、2025年の総漁獲可能量 (TAC) である7.3万トンを維持した場合、2038年に資源が乱獲状態及び過剰漁獲でなくなる確率 (Kobe plotのグリーンゾーンになる確率) はおよそ90%以上となる将来予測が示された。この結果を受け、2025年のICCAT年次会合において、熱帯まぐろに関する管理措置が議論されたものの、合意には至らず、2026~2027年のTACを7.3万トン、主要漁業国への国別割当、FAD管理規則を含む現行の熱帯まぐろ管理措置が引き続き適用されることとなった。なお、最近年 (2024年) の暫定漁獲量は約5.5万トンである。

## 利用・用途

刺身・すし・缶詰等に利用されている。

## 漁業の概要

大西洋において、メバチは主にはえ縄、竿釣り、まき網によって漁獲されてきた (図1上)。主として成魚を漁獲するはえ縄が漁獲の大部分を占めてきたが、大西洋は他の大洋と異なり、従来からまき網や竿釣りによる漁獲が比較的多い。まき網がFAD操業を開始した1991年以降、小型魚漁獲が増加した。総漁獲量も同様に増加し、1994年には過去最高の約13万トンに達したが、その後徐々に減少して、2005年以降は約6万~約8万トンで推移した (ICCAT 2025a)。2016~2019年は約7.3万~約7.9万トンと、6.5万トンのTAC (2016~2019年) を超過する高い漁獲が続いた。その後、2020年及び2021年にはそれぞれ約5.8万トン及び約4.7万トンと大きく減少し、当該年のTAC (それぞれ6.25万トン及び6.15万トン) を下回った。2024年の暫定漁獲量は約5.5万トンであり、TAC (6.2万トン) を下回っている。

2024年のえ縄漁獲量は総漁獲量の64%を占めているが、え縄の漁獲量が減少する中、2010年以降、まき網の漁獲比

率が増加している。特にアフリカ大陸西岸沖ではまき網の漁獲比率が高い (図1上、図2)。漁獲されるメバチの平均体重は、はえ縄で45~60 kg、竿釣りで20~30 kg、まき網で3~4 kgとなっている。現在、大西洋における我が国の漁業ははえ縄のみであり、まき網及び竿釣りはそれぞれ1992年及び1984年に操業を停止している。

大西洋における主要なはえ縄漁業国・地域は日本と台湾であり、近年5年は、全漁獲のおよそ27~44%を占めている (図1下)。2001年から2015年のはえ縄漁獲量は4万~5万トン程度で推移していたが、それ以降は減少傾向で、2021年に落ち込んだ後、回復の傾向を示した。2024年の暫定漁獲量は約

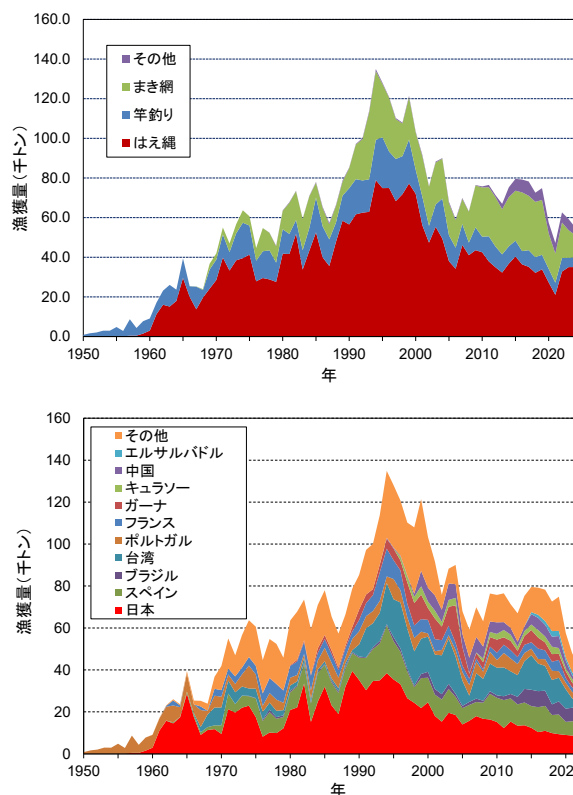


図1. 大西洋におけるメバチの漁法別漁獲量 (1950~2024年、上) 及び国・地域別漁獲量 (1950~2024年、下)

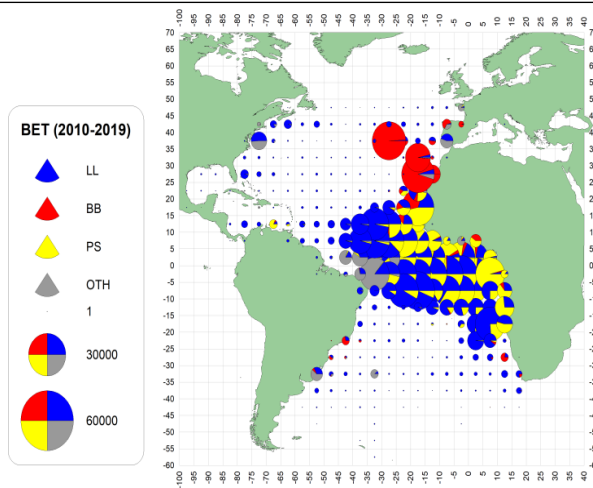


図 2. 主要なまぐろ漁業による大西洋におけるメバチの漁獲分布 (2010~2019年) (ICCAT 2021)  
 青：はえ縄、赤：竿釣り、黄：まき網、灰：その他。  
 凡例の丸は上から3万トン、6万トン。

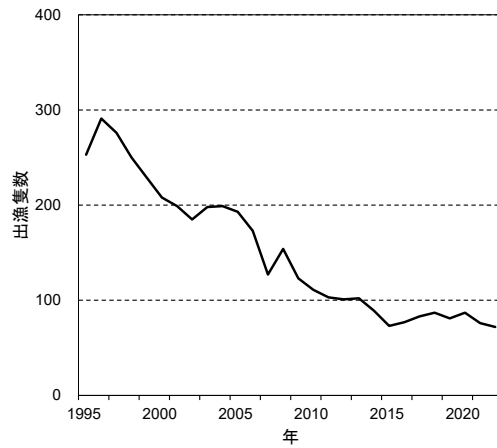


図 3. 大西洋における日本のはえ縄船の出漁隻数の推移 (1995~2022年、水産資源研究所資料)

3.5万トンであった。1956年に参入した日本のはえ縄は、当初キハダとビンナガを漁獲対象としていたが、その後、急速冷凍技術の導入により、1970年代半ばから刺身材料としてのメバチの需要が高まり、本種が主要な漁獲対象になるとともに、はえ縄漁場は次第に大西洋東部に集中していった。大西洋への参入以来、努力量は増加を続け、はえ縄の投釣数は1996年にはピークの1.2億釣に達したが、その後減少し2009年に実施された国際減船で日本の努力量は5,800万釣まで減少した。出漁隻数も1996年を境に減少傾向に転じ、2015年には73隻に減少した。2016年以降やや増加して2020年は87隻となったが、依然として低水準であり、2022年には72隻に再び減少した(図3)。

まき網は主にヨーロッパ連合(EU)、特にフランスとスペインのまき網が主体であり、近年規模を増加させているガーナのまき網を含め、東部大西洋のギニア湾を中心に操業が行われている(図2)。1990年代初頭には71隻が操業していたEUのまき網船は、1998年以来40~45隻に減少している。このEUのまき網船は付き物(もしくはFAD)群れもしくは素群れに対する操業の2タイプが存在するが、1991年以降FAD操業が増加しており、それに伴いメバチ漁獲量も増加した。近年では、大西洋のメバチ漁獲量の30~40%がまき網によるものである。まき網による本種の漁獲は1994年の約3.5万トンにピークとして、2007年の約1.3万トンまで減少を続けた。その後、増加に転じ、2016年に約3.0万トンに達したものの、その後はやや減少もしくは横ばいであり、2020年以降は約1.1~約1.8万トンと大きく減少した。これは、2009年から2011年頃まで継続し、その後沈静化したインド洋ソマリア沖を中心とする海賊行為(IOTC 2014)の影響によりインド洋を漁場としていた多くのはえ縄・まき網漁船が大西洋へ移動してきたことで、漁獲努力量が増加したことによると思われる。また、2020年以降の減少はより広範囲におけるFAD禁漁による可能性が考えられる。

竿釣りは主に、東部大西洋のガーナ、セネガル、アゾレス諸島、マデイラ諸島、カナリア諸島で操業が行われている(図2)。

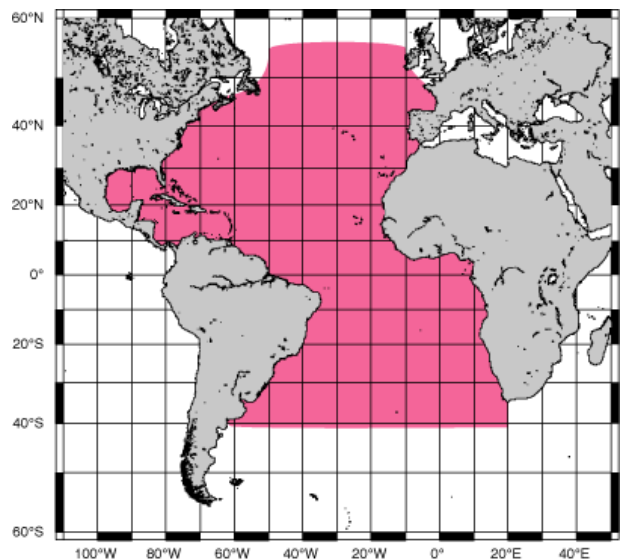


図 4. 大西洋におけるメバチの分布

メバチの漁獲サイズは、ガーナでは主に小型(およそ40~60cm)、セネガルでは中型以下(およそ40~80cm)、残る3か所は小型から大型(およそ40~120cm)が主体である。一方、西部大西洋ではブラジルが主要な竿釣り漁業国であるが、カツオのみを狙っており、メバチの漁獲はほとんどない。竿釣りの漁獲量は最近10年では約0.5万~約0.8万トンの間で変動し、2023年の漁獲量は約0.5万トンであった(図1下)。

### 生物学的特性

大西洋においてメバチは、北緯55度から南緯40度にかけてのほぼ全域に広く分布している(図4)。本種は他のマグロ類よりも生息深度が深いことが知られているが、大西洋においてもポップアップタグ調査の結果から、夜間は200m以浅の表層付近に分布し、昼間は水温躍層がそれ以深に移動する日周行動を行うことが明らかになっている(Matsumoto *et al.* 2004, Lam *et al.* 2014)。

表 1. 年齢-尾叉長の関係

年齢	尾叉長 (cm)	
	Cayré and Diouf (1984)	Hallier <i>et al.</i> (2005)
1	57.6	57.6
2	81.9	85.2
3	103.6	110.0
4	122.9	130.1
5	140.2	145.1
6	155.7	155.9
7	169.5	163.4
8	181.9	168.5
9	192.9	172.0
10	202.8	175.6*
11	211.6	
12	219.4	

\* 10+の体長

メバチの卵は分離浮性卵で油球が1個あり、受精卵の卵径は0.8~1.2mmである。産卵は稚魚の分布から、熱帯・亜熱帯域の水温24℃以上のほとんどの水域でほぼ周年行われていると考えられているが、大西洋における産卵や稚魚の分布に関する情報は少ない。他水域の情報から大西洋においても本種は多回産卵型の産卵を行い、産卵期にはほぼ毎日産卵し、産卵は夜間に行われると推察される (Matsumoto and Miyabe 2002)。最小成熟サイズは90~100 cm、14~20 kg (およそ3歳)と考えられ、4歳 (およそ130 cm) を超えるとほぼすべてが成熟する。

大西洋における本種の成長については、標識放流データ (Cayré and Diouf 1984)、脊椎骨 (Alves *et al.* 1998)、耳石日周輪の読み取り (Hallier *et al.* 2005)、標識放流データと耳石日周輪の読み取り (Waterhouse *et al.* 2022) により成長式が推定されている (表1、図5)。なお、2025年の資源評価には Hallier *et al.* (2005) の成長式 (Richards モデル) が用いられている。

本種の寿命について、耳石輪紋の解析により17歳とする研究例が報告されている (Andrews *et al.* 2020)。

大西洋における体長体重の関係式は Parks *et al.* (1982) のものが資源解析に用いられている。この式から求められる各尾叉長における体重を表2に示した。なお、体重実測値の最大値は200 kgである。漁業から得られた知見から、主にギニア湾を中心とした熱帯で生まれた稚魚は海流に乗りながら、もしくは遊泳しながら移動し、多くは熱帯や亜熱帯に留まるものの、一部は温帯域へ索餌回遊を行い、成熟に達したら産卵に適した水温の高い水域に戻るのではないかと想定されている。しかし、熱帯域にも広く小型から大型の個体が常時分布しており、特定の索餌域や産卵域が本種にあるかは不明である。メバチの小型魚は流れ物周辺においてキハダやカツオの小型魚と群れを形成するが、成長するとそのような傾向は見られなくなる。また、他水域のメバチ同様に適水温はキハダよりやや低く、従って分布も南北方向及び鉛直方向にキハダよりやや広い。

本種の性比に関して、年齢が増すに従って雄の比率が高くなることが知られている。はえ縄漁獲物の性比較では100 cm未滿、160 cm以上のいずれのサイズにおいても雄の比率が高く (Miyabe 2003)、また70~200 cmの体長範囲を比較した

表 2. 尾叉長-体重関係 (Parks *et al.* 1982)

尾叉長 (cm)	体重 (kg)
20	0.2
30	0.6
40	1.4
50	2.7
60	4.7
70	7.5
80	11.1
90	15.8
100	21.6
120	37.2
140	58.8
160	87.5
180	124.3
200	170.0

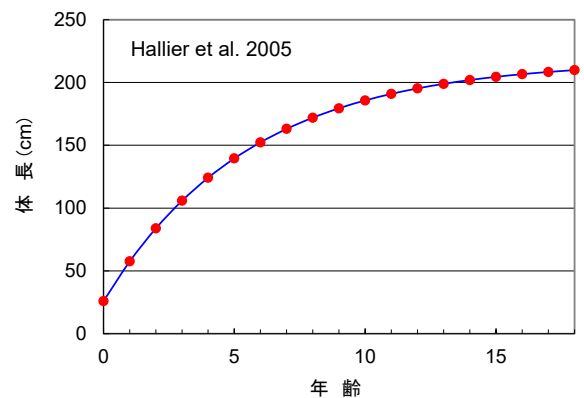


図 5. 資源評価で用いられたメバチの成長曲線

まき網漁獲物の観察においても雄が卓越している (Roberto *et al.* 2003)。

本種の胃中には魚類や甲殻類、頭足類等幅広い生物が見られ、餌に対して特別な選択性はないようである。しかし、他のマグロ類に比べてハダカイワシ類やムネエソ等の中深層性魚類が多い。

稚仔魚期には、魚類に限らず多くの捕食者がいるものと思われるが、あまり情報は得られていない。遊泳力が付いた後も、マグロ類を含む魚食性の大型浮游類による被食があるが、50 cm以上に成長すると、捕食者は大型のカジキ類、サメ類、歯鯨類等に限られるものと思われる。

現在、大西洋のメバチに複数の系群の存在は知られていないが、インド洋-太平洋のメバチとは遺伝的な差異が報告されている (Chow *et al.* 2000)。ミトコンドリア調節領域を用いた解析では、インド洋から大西洋への遺伝子流動が生じた可能性が指摘されている (Martinez *et al.* 2006)。

### 資源状態

本種に関する最新の資源評価は2025年にICCATの熱帯作業部会が実施した。ベイズ型余剰生産モデル (Just Another Bayesian Biomass Assessment: JABBA)、連続時間における確率的余剰生産モデル (Stochastic surplus production model in continuous time: SPiCT)、統合モデル (Stock Synthesis 3: SS3) を用いて行われ、SS3の結果が管理勧告に用いられた (ICCAT 2025b)。SS3は1950~2023年を対象とし、1つの海域、性

別を集約した構造、4つの季節区分、22船団を仮定し、初期資源量（1950年）から資源が利用されるように設定した。

CPUEは、はえ縄国が合同で解析した統合CPUEを軸に、エコーサウンダー（魚探が付いていてその情報を無線で送信し、離れた場所から鯖集魚群量をモニターできるブイ）のCPUE、まき網CPUE及び、カナリア諸島の竿釣りPUEの使用が検討され、統合CPUEとエコーサウンダーCPUEが資源評価に使用されることとなった（図6）。統合CPUEの解析には、日本、ブラジル、韓国、中国、台湾、米国、ポルトガル及びウルグアイが、操業ごとのデータを提供し、日本の科学者が解析を行った（Matsumoto *et al.* 2025）。エコーサウンダーCPUEは小型魚の資源量指数である。標準化されたはえ縄統合CPUEは1980年代後半から2010年代初頭までほぼ一貫した減少傾向が認められていたが、その後は減少が止まり低位で増減し、2020年以降増加の傾向を示した（図6上）。エコーサウンダーの標準化CPUEは2010～2013年にかけて低下、その後2016年初頭まで微増もしくは横ばい、2021年以降大きな季節変動を示した（図6下）。

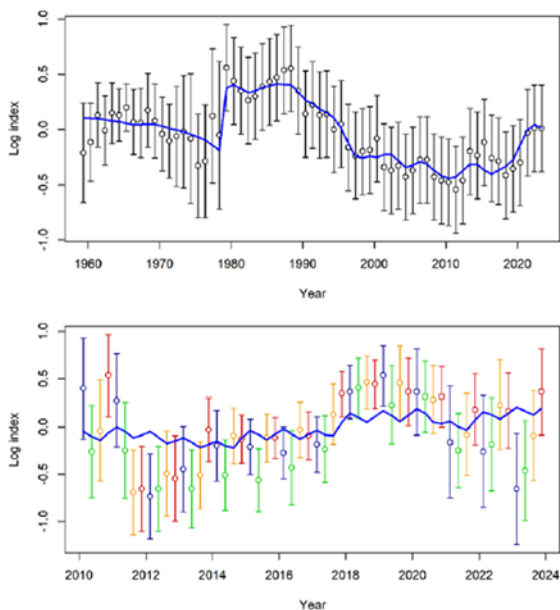


図6. 資源評価モデルに用いた標準化CPUE  
白抜き丸とエラーバーは標準化CPUEとその誤差を示し、青線は資源評価モデルが推定した値を示す。  
上：はえ縄統合CPUE（1959～2023年）  
下：FAD漁業に用いるエコーサウンダーのデータを利用した小型魚の資源量指数（2010年第1四半期～2023年第4四半期）（ICCAT 2025b）

イが、操業ごとのデータを提供し、日本の科学者が解析を行った（Matsumoto *et al.* 2025）。エコーサウンダーCPUEは小型魚の資源量指数である。標準化されたはえ縄統合CPUEは1980年代後半から2010年代初頭までほぼ一貫した減少傾向が認められていたが、その後は減少が止まり低位で増減し、2020年以降増加の傾向を示した（図6上）。エコーサウンダーの標準化CPUEは2010～2013年にかけて低下、その後2016年初頭まで微増もしくは横ばい、2021年以降大きな季節変動を示した（図6下）。

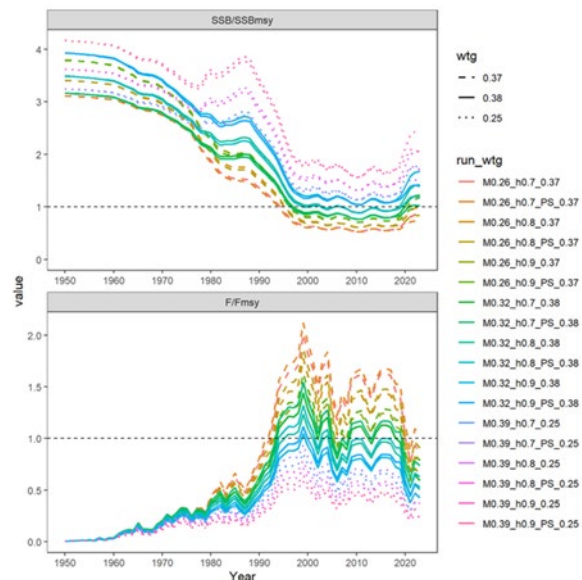


図7. 18種類のSS3から推定されたSSB/SSB<sub>MSY</sub>（上）とF/F<sub>MSY</sub>（下）の推移（1950～2023年、ICCAT 2025b）  
線の種類はモデルの結果に対する重み付けの違いを示す。

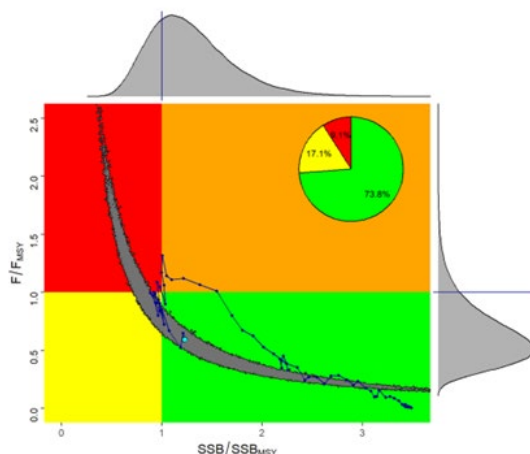


図8. 18シナリオのSS3から推定された資源状態の推移  
青丸は2023年の状態を示し、灰色で塗りつぶされた範囲はその95%信頼区間を示す。黒丸を結ぶ線は、状態の年変動（1950～2023年）を示す。  
縦軸は漁獲圧、横軸は資源量で現状/持続可能な値の比で示す。  
神戸プロットの上側と右側に、それぞれ横軸、縦軸についての頻度分布図を示す（1950～2019年、ICCAT 2025b）。

表 3. SS3 に基づくメバチ資源将来予測 (Kobe plot のグリーンゾーンになる確率)

Probability $F \leq F_{MSY}$ and $SSB \geq SSB_{MSY}$													
Catch (t)	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038
50000	86%	91%	94%	97%	98%	99%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
52500	86%	90%	94%	96%	98%	99%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
55000	85%	90%	93%	96%	97%	99%	99%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
57500	85%	89%	92%	95%	97%	98%	99%	99%	100%	100%	100%	100%	100%
60000	84%	88%	91%	94%	96%	97%	98%	99%	99%	100%	100%	100%	100%
62500	84%	88%	91%	93%	95%	96%	97%	98%	99%	99%	99%	100%	100%
65000	84%	87%	90%	92%	94%	95%	96%	97%	98%	99%	99%	99%	99%
67500	83%	86%	89%	90%	92%	93%	95%	96%	96%	97%	98%	98%	98%
70000	83%	85%	87%	89%	90%	92%	93%	94%	94%	95%	96%	96%	97%
72500	83%	85%	86%	87%	88%	89%	90%	91%	92%	93%	93%	94%	94%
73011	83%	84%	86%	87%	88%	89%	90%	90%	91%	92%	92%	93%	94%
75000	82%	83%	84%	85%	86%	87%	87%	88%	88%	89%	90%	90%	91%
77500	81%	82%	83%	83%	83%	84%	84%	85%	85%	85%	85%	86%	86%
80000	79%	80%	80%	80%	80%	81%	81%	81%	81%	81%	81%	81%	81%
82500	77%	78%	78%	77%	77%	77%	77%	76%	76%	76%	75%	75%	75%
85000	76%	75%	75%	74%	74%	73%	72%	71%	71%	70%	70%	69%	68%
87500	73%	72%	72%	71%	70%	69%	68%	67%	65%	64%	64%	62%	62%
90000	71%	70%	69%	67%	66%	64%	63%	61%	60%	59%	58%	57%	55%
92500	68%	67%	66%	64%	62%	60%	58%	56%	55%	54%	52%	51%	50%
95000	66%	64%	62%	60%	58%	56%	54%	52%	50%	48%	47%	46%	45%
97500	63%	61%	59%	56%	54%	51%	49%	47%	46%	44%	43%	42%	42%
100000	60%	59%	56%	53%	50%	47%	45%	43%	41%	40%	40%	39%	39%

モデルの構築はデータ準備会合の勧告を反映して2021年の資源評価のリファレンスケースから段階を踏んで行われた。暫定リファレンスケースを確定するため、作業部会は追加の感度分析を要請した。すべての感度分析結果を検討した結果、作業部会は予備的なりファレンスケースを大西洋メバチ資源評価の最終的なりファレンスケースとして採用し、二つの巻き網CPUEを不確実性の軸として不確実性グリッドの一部に組み込むことに合意した。さらに、データ準備会合での提案に基づき、不確実性グリッドの構成要素について議論した。自然死亡率(M)については25パーセンタイル、中央値(50パーセンタイル)、75パーセンタイル(4~10歳以上の平均Mはそれぞれ0.26、0.32、0.39)を選択し、M推定値の対数正規分布に基づいて重み付け(0.37、0.38、0.25)を行うことで、18の不確実性グリッドモデルを維持することが合意された。

親魚資源量は1960年代以降継続的に減少し、1990年代後半には中央値が最大持続生産量(MSY)付近になり、2020年以降は増加傾向を示した(図7上)。漁獲死亡率は1990年代半ばまで増加傾向を示し、2019年までは変動を伴い、中央値はMSYレベル付近を横ばいで推移し、その後MSYレベルを下回った(図7下)。2023年の資源状態は、MSY: 8.0万~11.4万トン(中央値8.6万トン)、MSYを実現する漁獲死亡係数(F)と産卵親魚量(SSB)に対する比は各々 $F/F_{MSY}$ : 0.36~0.98(中央値0.59)、 $SSB/SSB_{MSY}$ : 0.81~1.85(中央値1.23)と推定され、資源は乱獲状態ではなく、過剰漁獲も起きていない(図8)。

将来予測は漁獲量一定のシナリオで18種類のSS3の結果を統合し、表3に示すように、2025年の総漁獲可能量(TAC)(7.3万トン)を維持した場合、2038年に資源が乱獲状態及び過剰漁獲でなくなる確率(Kobe plotのグリーンゾーンになる確率)は90%以上であることが示された。

管理方策

2025年の資源評価を受け、2025年11月のICCAT年次会合

にて熱帯まぐろに関する管理措置が議論されたものの、合意には至らず、2026~2027年のTACは、現行措置である7.3万トンが引き続き適用されることとなった。日本の漁獲枠についても13,865.86トンが引き続き適用となる。また、まき網等のFAD操業についても、2026~2027年の条約区域全体でのFAD禁漁を、現行の45日間の措置を引き続き適用することとし、一隻あたりのFAD数の上限については、2025年の300基から2026~2027年は288基まで削減する措置が適用される。

執筆者

かつお・まぐろユニット  
 熱帯まぐろサブユニット  
 水産資源研究所 水産資源研究センター  
 広域性資源部 まぐろ第2グループ  
 井嶋 浩貴・松本 隆之

参考文献

Alves, A., de Barros, P., and Pinho, M.R. 1998. Age and growth of bigeye tuna, *Thunnus obesus*, captured in the Madeira archipelago. (SCRS/97/095) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 48(2): 277-283.  
[https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV048\\_1998/n\\_2/CV048020277.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV048_1998/n_2/CV048020277.pdf) (2025年11月28日)

Andrews, A.H., Pacicco, A., Allman, R., Falterman, B.J., Lang, E.T., and Golet, W. 2020. Age validation of yellowfin (*Thunnus albacares*) and bigeye (*Thunnus obesus*) tuna of the northwestern Atlantic Ocean. Can. J. Fish. Aquat. Sci., 47: 637-643. Doi: 10.1139/cjfas-2019-0328

Cayré, P., and Diouf, T. 1984. Croissance du thon obese (*Thunnus obesus*) de l'Atlantique l'après les resultants de marquage. (Growth of Atlantic bigeye tuna (*Thunnus obesus*) according to tagging results.) (SCRS/83/080) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 20(1): 180-187.

- [https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV020\\_1984/n\\_1/CV020010180.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV020_1984/n_1/CV020010180.pdf) (2025年11月28日)
- Chow, S., Okamoto, H., Miyabe, N., Hiramatsu, K., and Barut, N. 2000. Genetic divergence between Atlantic and Indo-Pacific stocks of bigeye tuna (*Thunnus obesus*) and admixture around South Africa. *Mol. Ecol.*, 9: 221-227.
- Hallier, J.P., Stequert, B., Maury, O., and Bard, F.X. 2005. Growth of bigeye tuna (*Thunnus obesus*) in the eastern Atlantic Ocean from tagging-recapture data and otolith readings. (SCRS/2004/039) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 57(1): 181-194. [https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV057\\_2005/n\\_1/CV057010181.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV057_2005/n_1/CV057010181.pdf) (2025年11月28日)
- ICCAT. 2001. Recommendation by ICCAT concerning the ICCAT bigeye tuna statistical document program. 11 pp. <http://www.iccat.int/Documents/Recs/compendiopdf-e/2001-21-e.pdf> (2024年11月29日)
- ICCAT. 2021 Report of the standing committee on research and statistics (SCRS) (Online, 27 September to 2 October 2021). 282 pp. [https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2021/REPORTS/2021\\_SCRS\\_ENG.pdf](https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2021/REPORTS/2021_SCRS_ENG.pdf) (2025年11月28日)
- ICCAT. 2025a. Report of the standing committee on research and statistics (SCRS) (Madrid (Spain)/Hybrid – 23-27 September 2024). 411 pp. [https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/Reports/2025\\_SCRS\\_ENG.pdf](https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/Reports/2025_SCRS_ENG.pdf) (2025年11月28日)
- ICCAT. 2025b. Report of the 2021 bigeye stock assessment meeting (Online, 19- 29 July 2021). 91 pp. [https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/Reports/2025\\_BET\\_SA\\_ENG.pdf](https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/Reports/2025_BET_SA_ENG.pdf) (2025年11月28日)
- IOTC. 2014. Report of the Sixteen Session of the IOTC Working Party on Tropical Tunas. 105 pp. [https://iotc.org/sites/default/files/documents/2014/12/IOTC-2014-WPTT16-RE\\_-\\_FINAL\\_DO\\_NOT\\_MODIFY.pdf](https://iotc.org/sites/default/files/documents/2014/12/IOTC-2014-WPTT16-RE_-_FINAL_DO_NOT_MODIFY.pdf) (2025年11月28日)
- Lam, C.H., Galuardi, B., and Lutcavage, M.E. 2014. Movements and oceanographic associations of bigeye tuna (*Thunnus obesus*) in the Northwest Atlantic. *Can. J. Fish Aquat. Sci.*, 71: 1529-1543.
- Martinez, P., Gonzalez, E.G., Castilho, R., and Zardoya, R. 2006. Genetic diversity and historical demography of Atlantic bigeye tuna (*Thunnus obesus*). *Mol. Phylogenet. Evol.*, 39: 404-416.
- Matsumoto, T., Ijima, H., Su, N-J., Lim, J-H., Lin, H., Lauretta, M., Sant'Ana, R., Coelho, R., Forselledo, R., Sung, Y-F., Park, H., Zhang, F., Die, D.J., Lino, P., S. Jiménez Nirazuka, S., Lee, S.I., Feng, J., and Mas, F. 2025. Relative abundance indices of Atlantic bigeye tuna (*Thunnus obesus*) estimated using data from multiple longline fleets. (SCRS/2025/084) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 82(5): 1-41. [https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV082\\_2025/n\\_5/CV082050084.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV082_2025/n_5/CV082050084.pdf) (2025年11月28日)
- Matsumoto, T., and Miyabe, N. 2002. Preliminary report on the maturity and spawning of bigeye tuna *Thunnus obesus* in the central Atlantic Ocean. (SCRS/01/155) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 54(1): 246-260. [https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV054\\_2002/n\\_1/CV054010246.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV054_2002/n_1/CV054010246.pdf) (2025年11月28日)
- Matsumoto, T., Saito, H., and Miyabe, N. 2004. Swimming behavior of adult bigeye tuna using pop-up tags in the central Atlantic Ocean. (SCRS/2004/037) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 57(1): 151-170. [https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV057\\_2005/n\\_1/CV057010151.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV057_2005/n_1/CV057010151.pdf) (2025年11月29日)
- Miyabe, N. 2003. Recent sex ratio data of the bigeye tuna caught by the Japanese longline fishery in the Atlantic. (SCRS/2002/152) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 55(5): 2028-2039. [https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV055\\_2003/n\\_5/CV055052028.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV055_2003/n_5/CV055052028.pdf) (2025年11月28日)
- Parks, W., Bard, F.X., Cayré, P., and Kume, S. 1982. Length-weight relations for bigeye tuna captured in the eastern Atlantic Ocean. (SCRS/81/059) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 17(1): 214-225. [https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV017\\_1982/n\\_1/CV017010214.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV017_1982/n_1/CV017010214.pdf) (2025年11月29日)
- Roberto, S., Xavier, B.F., and Asine, A. 2003. Consideraciones sobre el sex-ratio de patudo (*Thunnus obesus*) en el Atlántico este tropical, capturado por la flota de cerco. (SCRS/2002/137) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 55(5): 1951-1953. [https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV055\\_2003/n\\_5/CV055051951.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV055_2003/n_5/CV055051951.pdf) (2025年11月28日)
- Waterhouse, L., Ailloud, L., Austin, R., Golet, W.J., Pacicco, A., Andrews, A.H., Diouf, K., Ndiour, Y., Krusic-Golub, K., da Silva, G. and Hoenig, J.M. 2022. Updated growth models for bigeye tuna (*Thunnus obesus*) in the Atlantic Ocean. *Fish. Res.*, 253(106317).

メバチ（大西洋）の資源の現況（要約表）

世界の漁獲量 (最近5年間)	4.7万～6.3万トン 最近(2024)年:5.5万トン 平均:5.6万トン(2020～2024年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	0.9万～1.4万トン 最近(2024)年:1.4万トン 平均:1.1万トン(2020～2024年)
資源評価の方法	統合モデル(SS3)による解析
資源の状態 (資源評価結果)	$F/F_{MSY} = 0.36 \sim 0.98$ (中央値 0.59) $SSB/SSB_{MSY} = 0.81 \sim 1.85$ (中央値 1.23) 2023年の資源状態は、過剰漁獲ではなく、乱獲状態でもない
管理目標	MSY:8.0万～11.4万トン(中央値 8.6万トン)
管理措置	○TAC 2026～2027年:7.3万トン(日本:約1.39万トン)  ○FAD操業の禁漁期 条約区域全体で45日間(2026～2027年)  ○FAD数制限 1隻あたり288基まで(2026～2027年)
管理機関・関係機関	ICCAT
最近の資源評価年	2025年
次回の資源評価年	未定